「いわての復興教育推進事業（交流学習スクール）」成果報告書

学校名：大槌町立吉里吉里小学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

本事業は、紫波町にある上平沢小学校と片寄小学校との「ふるさと交流学習」を基盤とした、今年で３５回目になる活動である。東日本大震災の際は、それまでの交流が縁となって、志和公民館から支援の手が差し伸べられ、生まれて間もない赤ちゃんも含めた８５名がそこへ避難し、お世話になっている。震災後も絶え間なく続いているこの交流学習を、今年度は復興教育として、次の３点をねらいに設定して取り組んだ。

① 両町の児童が見学や体験を通して、お互いの地域の特色を理解するとともに、交流を通じて友情を深め合う。

② 交流のお世話をすることを通して、親や家族、地域を見直し、より良い地域づくりについて考える機会とする。

③ 震災当時の様子と復興の進捗状況について聞く機会を設け、理解を深める。

近年児童数の減少に伴い、事業の継続が難しさを増す中、地域を挙げて継続の意志は硬く、今年度も実施することができた。参加者の中には、小学校時代にこの交流に参加した経験も持っている保護者や地域の方々もおり、思わぬ再会を喜びながらの活動となった。

Ⅱ　取組の概要

１　実践校

大槌町立吉里吉里小学校　第５学年１０名
紫波町立片寄小学校　　第５学年１３名
紫波町立上平沢小学校　　第５学年　９名

２　実施期間

前期　令和元年７月２７日（土）
後期　令和元年９月２１日（土）

３　実践内容

（１）前期交流

ア　開会式

吉里吉里学園ＰＴＡ会長より、これまで３５年に渡って続けられてきた「ふるさと交流」の歴史や現在も続いている復興工事の様子についてお話を伺った。東日本大震災の時は、紫波（志和）地域から温かい救援があって心強かった事や、その年も休まずに交流活動を行った事などが紹介された。

イ　名刺交換・グループ作り

１つのグループに、両町３校の子どもたちが全員配属するようにグループ分けをしておき、事前に作成していた名刺（自己紹介カード）を交換する活動。緊張しながらも、少しずつ打ち解けていった。

ウ　公園での海水浴

友だち同士で、海水浴やサップ、砂遊び等を楽しんだ。

エ　スイカ割り

グループごとに協力しながらスイカ割りを楽しんだ。その間に、保護者達は昼食準備を進めた。

オ　昼食

グループごとに会食。このころには、子どもたちもすっかり打ち解けムード。

カ　閉会式

学校プールのシャワーを浴び、着替えている間を利用して、紫波町の保護者達に吉里吉里地区に伝わる伝統芸能「獅子踊り」「大神楽」「虎舞」のDVD（７月の「郷土芸能発表会」で、子どもたちが披露したもの）をお見せした。９月、紫波町を訪れ再会することを約束し、紫波町の子ども達を笑顔で見送った。

（２）後期交流

ア　歓迎会

後期は大槌町立吉里吉里小学校の５年生児童が、紫波町志和公民館へ。２か月ぶりの再会に、お互い照れくさそうな表情だったが、会が進むにつれ打ち解けてきた。

志和公民館を大震災の避難所として開放してくださった８年前、公民館の指導員だった熊谷育子さん（現紫波町議会議員）から、当時の話をお聞きした。吉里吉里から、生まれて間もない赤ちゃん(現在本校３年生児童)含め８５名の方々が志和公民館に避難したことや、食事の献立、準備の方法等詳しく学ぶことができた。

イ　そば打ち体験

紫波町「一のそば」の方々の指導のもと、初めてのそば打ち体験。恐るおそる手を出し、こねたりまとめたり。「手つきがいいね。」と褒められると、自信もついて、子どもたちの手にも力が入った。そばを切る作業では、大きな包丁にドキドキする児童もいたが、だれも怪我することなく、貴重な体験を満喫できた。

ウ　昼食

美味しい出汁で掛けそばを作っていただき、自分たちで打ったそばを昼食に。時折、太いそばも出てきて、「誰が切ったぁ？」と、子どもたちの会話も弾んだ。みんなでお代わりをしながら楽しく会食できた。紫波町でそばの栽培に力を注いでいることを学ぶこともできた。

エ　自転車競技場での走行体験

すり鉢状の自転車競技場に着くと、子どもたちの気持ちも開放的になった。しかし、斜面の上側を歩いてみると、高くて怖い。手すりにつかまっていても大騒ぎ。これは、経験してみなければ分からない感覚だった。また、この日練習に来ていた自転車競技の選手たちの走行も見ることができ、その後の自転車走行体験も盛り上がった。

オ　ラ・フランス温泉館

すっかり打ち解け合った子どもたち同士で、仲良く入浴。様々な種類の温泉に大喜び。

カ　お別れ会

楽しい時間はあっという間に過ぎるものである。子どもたちも、やっと仲良く話せるようになったところで帰る時刻が来てしまった。またいつか再会できる日を楽しみにしながら、吉里吉里の子どもたちはバスに乗り込んだ。紫波町の方々は、みんなでアーチを作って見送ってくださった。

Ⅲ　取組の成果と課題

1　参加者の感想

そば打ち名人といわれてうれしかったです。食べてみたら、とても美味しかったです。(児童)

自分の打ったそばは太かったけど、おいしかったです。そば畑の耕地面積は、３６５ha だそうです。岩手県内１番と聞いて、とても広いんだなあと思いました。(児童)

吉里吉里で育ち、５年生の頃ふるさと交流を体験していた私が親になり、わが子が交流生になるなんて想像もしていませんでした。この交流の良さは、初めて会った友達と一緒の体験をしながら、自分の、そして他の人の考え方や感じ方に触れることだと思います。…(中略)…子どもたちの打ち解ける速さに驚き、素直さと明るさが微笑ましく、そして、改めてあの当時の交流学習を支えてくれた両親や先生方に、感謝の気持ちでいっぱいになりました。本当にありがとうございました。(保護者)

私は、交流が楽しみだったけど、前回自分からあまり話しかけなかったので、紫波のみんなと仲良くなれるか心配でした。そば打ち体験が終わってからの待ち時間で、同じ班の人とたくさんおしゃべりできたし、そばも美味しかったので、ほっとしました。その後の自転車や温泉では、すっかり仲良くなって、楽しい思い出になりました。また一緒に遊びたいです。(児童)

2　成果と課題

（1）　成果

・　３５年も続くふるさと交流。その間、東日本大震災があり、志和の皆さんがどのように吉里吉里を思い、避難所に受け入れてくださったのか、当時の写真や食事の献立表等を見せていただきながら話を聞く機会となり、保護者にとって感慨深く、また子どもたちにとっても学びの多いひと時となった。

・　前期、後期あわせて各校の校長、PTA 会長、参加児童とその担任教諭、保護者の代表が、感想文を書き「まとめの文集」を作成している。小学生ながらに他の文化に触れた驚きや学び、友だちとの思い出が綴られ、改めて自分の故郷の良さも見直す一助となっている。

（2）　課題

・　他地域との交流を通して、その地域の良さと自分の故郷の良さを両方学べるよう、意図的な計画・実践が必要不可欠である。

・　児童減少に伴い、準備をする保護者や PTA 役員への負担が増加している。交流の仕方等見直しが必要である。